

〔直訳〕

9 そして 通り過ぎつつ イエスは そこから 見た
人を 座っているのを 収税所の上に、マタイと言われる人を、
そして 言う 彼に、
あなたは従いなさい 私に。
そして 立ち上がって 彼は従った 彼に。

10 そして 起こった 彼が 横たわっていた 家の中で、
そして 見よ 多くの 徴税人たちが そして 罪人たちが 来て
一緒に横たわっていた イエスと そして 彼の弟子たちと。
11 そして 見て ファリサイ派の人々は 言っていた 彼の弟子たちに、
なぜ 徴税人たちと罪人たちと共に 食事をする あなたたちの先生は

12 だが彼は 聞いて 言った、
必要としていない 健康な者は 医者を しかし 病気の者は。
13 だが行って あなたたちは学びなさい 何で それはある、
「憐れみを 私は望む そして ない いけにえを」
なぜなら 私は来なかった 呼ぶために 正しい人たちを そうではなく 罪人たちを。

〔新共同訳〕

9 イエスはそのをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。10 イエスがその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。11 ファリサイ派の人々はこれを見て、弟子たちに、「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。12 イエスはこれ聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。13 『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

①構成

②9節

⑦「イエスは通り過ぎつつ見た」。この段落はイエスの行動の描写から始まる。前の段落(九1-8)では、イエスは中風の人をいやし、「地上で罪を赦す権威」を与えられていることを示した。これに続く6節以下では、イエスがマタイを「見て」、彼を召し出す。

⑧イエスは「マタイ」と呼ばれる人が収税所に座っているのを見た。並行箇所のコロサ2章14節とルカ5章27節では、この人の名は「レビ」となっている。ここで名前が変更された理由は

不明である。なお、十二人の中にはレビの名はない（マタ一〇三並行）。

㊦ イエスは通り過ぎつつマタイを見て、「私に従いなさい」と言う。マタイは「立ち上がって従った」とあるように、イエスの呼びかけに即座に応える。

㊧ 10―11節

㊦ 10節から場面が変わる。「見よ」は注意や熟考を促すとき、また新しい事柄や予想できないことを語る時に用いられる。「イエスが横たわっている」とき、「多くの徴税人たちと罪人たち」が「来て、イエスと彼の弟子たちと一緒に横たわっていた」。

㊦ 11節では予想できない事態を見たファリサイ派の人々の反応が描かれる。「徴税人たちと罪人たちと共に食事をする」ことは彼らには受け入れられない行動である。

㊨ 12―13節

㊦ ファリサイ派の人々が弟子たちを問い詰めるのを聞いて、イエスは言う。「健康な者は医者が必要としないが、病気の者は医者が必要としている」。イエスは論敵の非難をかわすのに、このようなたとえをよく用いている（マコ二20、三24）。

㊦ さらにホセアの言葉を引用して、その意味を「行つて学びなさい」とファリサイ派の人々に命じる。「憐れみを私は望み、いけにえを望まない」はホセア6章6節の引用であり、並行箇所マルコとルカには欠けている。これは新約聖書ではマタイだけが引用する句であり、マタイ12章7節と共に、マタイによる挿入と考えられる。イエスが罪人との交わりを持つのは、神が憐れみの行為を求めているからである。

㊦ 「行つて学びなさい」も並行箇所には見られない。旧約聖書を学ぶなら、イエスの行為の意味を理解することができるはずである。マタイのイエスは重荷を負う者にも「わたしに学びなさい」と求める（一一29）。

㊩ イエスは見て、言う（9節）

㊦ イエスは最初にペトロたちを弟子に召し出した時、ガリラヤ湖のほとりを歩いてきた。その時と同様に、ここでもイエスがマタイのそばへと近づいて行く。イエスは「通り過ぎつつ」、マタイを「見て」、私に従いなさいと「言う」。マタイは「立ち上がって」、イエスに「従った」。

㊦ マタイが召し出されるこの場面にも、新約聖書の召命物語に共通する一定のパターンが見られる。

- (1) 場所を移動するイエス
- (2) 弟子とするべき人を「見る」
- (3) 従うようにと「言う」
- (4) 声をかけられた者の動作
- (5) 彼は「従う」

新約聖書の召命物語はこの五つの要素からできている。これらの要素のうち召命物語の本質を示すのは、おそらく(2)と(3)である。なぜなら、召命物語の要点をかいまんで言えば、「見て、従いなさい」と言った。すると、従った」ということであり、奇跡と同様に、神の言葉のように出来事となる言葉を語るイエスに焦点が置かれていると思われるからである。

㊦ イエスの弟子となる者は、自ら師を求めてイエスにたどり着くのではなく、イエスが近づいてその人を弟子とする。弟子の召命という出来事の主導権はまったくイエスの手にあり、イエスに声

をかけられた者たちは即座にイエスに従う。しかし、彼らがなぜイエスに従う気持ちになったかは何も書かれていない。ただ彼らはイエスの持つ大きな力に引き寄せられて行く。

④ イエスに呼び出されたペトロとアンデレは網を「捨て」、ヤコブとヨハネは舟と父親を「残して」イエスに従う(マタイ18-22)。網を「捨てる」、舟と父親を「残す」と訳されている言葉は同じ動詞であり、基本的な意味は「放す・手放す」である。ペトロたちはイエスの言葉に引き寄せられるように、網や舟、父親を手放してイエスに従う。

⑤ マタイはイエスに呼ばれると「立ち上がって」、イエスに従った。「立ち上がる」という動詞をマタイの決意を表すと読むこともできるかもしれないが、むしろ「座っている」マタイが「立ち上がる」という変化が起こったことに注目したい。座っているマタイを立ち上がらせたのはイエスの「私に従いなさい」という言葉である。マタイもまたペトロたちと同様に、イエスの言葉に引き寄せられている。さらにここでは、イエスが「従いなさい」と命じると、マタイは「従った」というように同じ動詞を繰り返し返すことによって、イエスの言葉が出来事となって現れたことが浮き彫りにされている。

③ イエスと一緒に食事をする(10-11節)

⑥ 10節に「横たわっている」と「一緒に横たわっている」という動詞が用いられている。「横たわっている」という動作は食事の姿勢を表す。ギリシア人やローマ人は食卓を囲む長椅子に横たわって食事をしたが、ユダヤ人も同様の姿勢で食事をした。

⑦ 「徴税人たちと罪人たち」はイエスと一緒に食事をしている。当時はローマ帝国の属州では、徴税権を買った徴税人が税を集めた。税額は徴税人の裁量に任されており、彼らは不当な取り立てをしていたために軽蔑された。また、ローマ帝国に仕える者であり、異邦人との交わりによって祭儀的に不浄であるためにも嫌われ、罪人の仲間とされた。「罪人」とは律法学者やファリサイ派から律法を守らないと批判された人々であり、徴税人や娼婦などが罪人と呼ばれた。

⑧ ファリサイ派の人々はイエスが「徴税人たちと罪人たち」と共に食事することを批判する。なぜなら、ユダヤ教では、食事は神が与えた食物を感謝と賛美をささげて聖別して食べるという行為であり、一種の礼拝とみなされていたからである。そのため、ユダヤ教の人々は罪人が食事に加わることによって汚されることを避けようとした。

⑨ この段落では「徴税人たちと罪人たち」が繰り返され、「一緒に・共に」「横たわっている・食事をする」などが用いられている。自分たちが目にした出来事を言葉を変えて繰り返すことにファリサイ派の人々の困惑と頑なさが見られている。彼らはイエスの取った行動に示されている神の思いを理解できない。

④ 神は憐れみを望んでいる(12-13節)

⑩ 神への感謝と賛美をささげて共に食事に与えることは、神の共同体として一つになるという宗教的な意味合いがあった。ファリサイ派の人々は食事を汚さないために、神の共同体から罪人を排除した。ファリサイ派の人々は、自分たちが思い描く「神の支配」とは異なる現実が、イエスによって目の前に繰り広げられていることに不服を感じている。そこで、イエスは「健康な者は医者が必要としないが、病気の者は医者が必要としている」と語り、マタイ福音書はこのイエスの言葉に、ホセア書の引用を付け加える。

⑤ 紀元後七十年にエルサレム神殿が崩壊した後、ユダヤ教は神殿祭儀を行うことができなくなった。犠牲祭儀を行うことのできない状態を説明するのに、彼らは「憐れみを私は望み、いけにえを望まない」というホセア6章6節の言葉を用いていた。マタイ福音書は13節にこの言葉を引用して、罪人と共に食事をするイエスこそが「神の憐れみ」を実現したと主張する。彼らはこの言葉の意味を「行つて学ぶ」必要がある。「神の憐れみ」は、彼らが排除した人々に向けられている。イエスは、この神の憐れみに人を出会わせるために「来た」のである。

⑥ 「学ぶ」と訳される語はギリシア語のマンサノーである。この語は「教えを受けて」学ぶという意味する。キリスト者が聞いて学ぶことを求められるのは、その生活が生来的な資質に基づくというよりは、キリストを通して示された神の心と深く関わっているためである。

⑦ キリスト者は、すべてにおいて模範であるキリストから学ぶことができる。キリストは御子でありながら、多くの苦しみによって従順を「学び」（へブ5:8）、重荷を負う者に彼に「学ぶ」なら、安らぎが得られると呼びかける（マタ1:29）。またパウロが彼から「学んだ」ことを実行するなら、平和の神が共にいると教え（フィリ4:9）、ローマの人々には、彼らが「学んだ」教えに反する人々から遠ざかるようにと忠告する（ロマ1:6-17）ように、キリスト者は使徒からも学び、さらに自然からも学ぶことができる。季節を知らせるいちじくの木から教えを「学ぶ」ことができた者は、人の子が戸口に近づき、終わりの日が近いことを悟る（マタ2:4-32並行）。

⑤ 神の支配が近づく

⑧ マタイ福音書は奇跡物語を8-9章にまとめて、自然を支配するイエスの力（8:23-27）、悪霊を支配するイエスの力（8:28-34）、人間を支配するイエスの力（9:1-8）について述べている。自然や悪霊を支配し、人間に罪の赦しを与えることのできるイエスの到来によって、神の支配が近づいていることが人々の目に明らかにされる。マタイの召命はこれらの奇跡物語のすぐ後に置かれている。このような構成をたどつてゆくと、マタイを引き寄せた力は、イエスもたらす「神の支配」であるとマタイ福音書は主張していることがわかる。

⑨ この「神の支配」は、無条件で弟子を呼び出す。ファリサイ派の人々が大切にしている律法遵守という厳格さは要求されない。「神の支配」が無条件で人々に近づくことは、「徴税人や罪人」がイエスと共に食事にと与るといふ形で示される。「イエスの弟子」とはイエスの呼びかけに従い、罪人と一緒に食事を受け入れる者である。しかし、この食事を良く思わない人々がいる。ファリサイ派の人々から見れば、「徴税人や罪人」は律法を守ることのできない生活をしている人々であるから、共に食事にと与ることなどはまさに忌み嫌うものでしかない。

⑩ 13節ではホセアの言葉を「学ぶ」なら、イエスが罪人と食事を共にすることの意味を知ることができるかと教えている。イエスは神の憐れみの心を現す人だからである。イエスが罪人と食事を共にしたのは、偏見を捨てた豊かな心や踏みつけられた人々への同情を示すためではなく、それを越えて、いつそう深い次元にまで関わっている。それは救いの共同体を示すためであり、ファリサイ派が罪人と断罪して接触を避けた人々をその共同体のメンバーとするためである。罪人との食事は神の憐れみを視覚化し、その意味を明確にする最良の方法となったのである。

⑪ 罪人を避けることではなく、罪人を呼ぶ（招く）ことを神は望んでいる。人の思う正しさを遙かに超える神の思いに目を向けさせるためにイエスは私たちのもとに来た。神の憐れみの心と生きべき正しさに気づくために、イエスのもとに「行き、学ぶ」ことが求められている。